

場所をめぐる私的感覚について —地理学の開闢, あるいは語りえぬものの地理学—

泉谷 洋平*

On private senses of place:
the beginning of geography or geography of the inexpressible

II 「場所の発見」と変性意識.....	37
(1) 変性意識としての「場所の発見」.....	37
(2) 語りえなさの問題.....	39
III 場所の発見と存在論的独我論.....	40
(1) ウイトゲンシュタインと「語りえぬもの」.....	40
(2) 意味体験と風景相の変移.....	42
IV むすび.....	46

I はじめに

本稿は、体系的にまとまった論考というよりは、場所をめぐる私的体験、私的感覚についての、一種の覚え書きである。このテーマについて論じるために、独我論、私的感覚、意味体験といった晩年のウイトゲンシュタインの哲学をめぐる議論が参照される。これらは必ずしも専門的な哲学の知識がなければ理解が出来ないようなテーマではない。むしろ、専門的な哲学の知識が無くとも誰でも経験しうるようなありふれた出来事が、ウイトゲンシュタインの議論の対象になっている。しかし、その一方で、こうした経験を自ら持ったことのない人には、何が論じられているのかさっぱり分からないという可能性もある。

したがって、本稿は原理的に言って全ての人に理解しうるものではないかもしれない。また、哲学は

何か人生にかかわる普遍的で難解な問題を論じるものだという先入観を持っている人にも、同様に何が論じられているのか理解できないであろう。あらかじめ断っておくが、本稿が対象とするのは、ばかばかりしいくらいに意味のない些細な日常の（しかし、少しだけ非日常的な）出来事である。そうした出来事があるということ自体が、筆者にはなにやら謎めいたもののように思えたので、その謎を学問的な問いの形に近づけることは出来ないか、試してみようと思った次第である。したがって、本稿が論じていることを全く理解できない読者がいたとしても、それは読者のせいでも筆者のせいでもない。ただ、世の中にはそういったどうにも理解できない、理解してもらえないことがあるという事実が露呈したにすぎない。

しかし、「誰かになかなか理解してもらえなさそうな、私的な謎」に言葉を与え、それを学問的な問

* フリー

いへと練り上げていくプロセスであれば、本稿を通じて読者に例示することは出来るであろう。そして、その例示は、筆者が論じていることそれ自身が理解できない人に対しても、決して不可能な試みではない。また、まとまった論考ではない覚え書きやエッセイであっても、あるいはそういうものであればこそ、いまだ学問としては語られることがないテーマに触れることだって出来るかも知れない。

以下のような私自身の体験から話を始めることにしたい。

その日、私は朝から京都で仕事だった。京都駅で電車を降り、地下街の進々堂に立ち寄る。京都で仕事の日には、朝の九時半前に焼き上がるベーコンエビがいつもの朝食だった。まだ湯気の上がるベーコンエビを小脇に抱え、階段を上がってスターバックスに駆け込み、オープンテラスに腰を下ろしてコーヒーで一息入れる。風はもう少し涼しくなっていたが、見上げた駅ビルの上空はまだ夏の青だった。その時、背中がざわざわとそよいだ感じがしたかと思うと、次の瞬間、私は京都駅の地面と空と自分の体が溶けて一つになっていくかのような感覚を覚えた。

その日、私は仕事で大阪市内を自転車で移動していた。六万休町の交差点を過ぎて谷町筋を北に向かって走っていた。沿道の木々の緑が日差しに映えて色濃く輝き、その緑が視界の先のそのまた向こうまで、ずっと延々続いていくような錯覚を覚えた。すると、なぜか、谷町筋を北に向かって走っていたはずだったのが、全く知らない町の初めて通る道を西から東に向かって走っているような気分になり、しかも目の前の丘の向こうには大きな森が広がっているような気がしてきた。

私にとっては、大きな通りには、東西南北の方向とは別に、感覚的な「縦」や「横」の「向き」というものがある（多くの場合、それらは東西方向や南北方向と対応することが多いのだが）。ある日私はふとしたきっかけで、いつもの感覚なら「横向き」に走っている道である大阪市内の土佐堀通りを、縦向きの通りだと思いこんでみることにした。すると、縦の通りに姿を変えた土佐堀通りに沿って進んでいった先が、急に未知の世界であるかのような感覚に陥った。通りを上へ上へと進んでいった先に海があることだけはわかっていたが、そこに至るまでの風景はまだ見慣れないものであるという感じがした。海にほど近い自宅に向かって「縦向きに」進んでいるうちに、交差点を通過するたびに拓けてくる方々の見慣れない景色のその先が気になり、気がつくといつもの帰路

からはそれた道を夢中になって進んでいた。

私には、何気なく日々の生活を営む中で、ふとある場所の本質、特徴、表情、謎などに触れてハッとしてしまう瞬間を体験することがある。そういった体験が日常的に起こるわけではないが、かといって、そうした体験が全く異質な非日常的体験というわけでもない。こうした私の体験を、本稿では「場所の発見」と呼んでおくことにする²⁾。私の経験上、「場所の発見」は、概ね以下のような特徴のいずれかを共有しているように思われる。

第一点目は、それが体験される際には、背中がゾクゾクしたり、耳が塞がれて圧迫されるような感じを受けたりするなど、何らかの（不快ではない）身体的な感覚が伴っている（とりわけ、背中がそよぐような感じを受けることが多い）。第二点目に、その出来事は反復して体験することができない。言い換えれば、その出来事の本質は、それが生じた特定の時空間の固有性と切り離して考えることができない。第三点目に、そうした特定の時空間と結びつく地名を用いずして私はその出来事を想起し記述することができないにもかかわらず、その出来事はその地名の名指す対象と必然的な結びつきを持っていない。例えば、上記の第一、第二の事例では、私に生じた出来事と京都駅や谷町筋という場所との間には何の内的連関もない（それが例えば名古屋駅や上町筋であってはならない理由を説明できない）。第四点目として、私とその出来事を記述し他者に伝えようとする際に、必ず何らかの「伝わらなさ」が残ってしまうような感覚に陥る（また、私自身がその体験を想起しようとする際にも、この「伝わらなさ」が「思い出せなさ」の感覚として体験されることがある）。そして第五点目は、これらの体験は、日常の感覚から意味づけることが困難だということである。つまり、その出来事は決して不快な体験ではないものの、そのことが起こらなかったとしても、それによって私の日常生活が不幸だということにはならないように思われる。本研究で「場所の発見」と呼ぶのはこうした特徴の全て、あるいはいずれかを有するような私の体験のことである。

本稿でこうした問題を考察しようとするに至ったきっかけは、直接的にはウィトゲンシュタインや永井均の独我論をめぐる哲学との接触である。しか

し、とりわけこうした問題を人文地理学と関連づけられると考えるようになったのは、大平（2002）が提起した「固有名としての地名」をめぐる哲学的な問題と、それを巡って大平氏、成瀬厚氏、中島弘二氏との間で繰り広げられた論争（成瀬 2003、中島 2003、大平 2003）の存在が大きい。大平は、カテゴリー化という観点から見ると、地名の機能は一般名の機能と連続しており、地名＝固有名とする考え方は相対化されざるをえないとしている。これに対する成瀬氏と中島氏の立論は、大平氏の主張や立論の根幹に関わるものではなく、論争そのものが成立した意義は別にすれば、そこで議論が大きく前進したとは言い難いものであった。私自身は、大平氏の議論の詳細やその結論に対して大きな異論があるわけではなく、むしろ、大平氏の主張が妥当だとしたときに、そこで提起されると思われる次のような問題に関心がある。それは、「地名が一般名と同じ機能であるとしても、なお人々が、とりわけ多くの地理学者が場所や地名に某かの固有性を見出したくなるのは、なぜなのか」という問題である。本稿でこの問題に正面から取り組むわけではないが、それでも本稿には、私自身の日常的な生をいわば「フィールド」としながら、こうした人文地理学に関わる問いを私なりに洗練させるための準備作業という意味合いもある。

以下、「場所の発見」という現象を考察する際の参照点として、二つの話題を提示する。一つは、須原一秀の蒐集した膨大な「変性意識」に関する事例、今一つは晩年期のウィトゲンシュタインによるアスペクト（相貌、ないし風景相と訳される。以下、風景相）と閃きの体験に関する哲学的断章である。まず、前者について、「場所の発見」の体験と比較しつつ検討してみたい。

II 「場所の発見」と変性意識

(1) 変性意識としての「場所の発見」

ここでは須原（2000）が蒐集し分析した「変性意識」の事例について検討する。変性意識とは、(1) 何かのきっかけに、(2) 時空間や主観客観、自己や言語に対する感覚が日常的なそれと著しく変わって

しまい、(3) 恍惚感、眩惑感、解放感、溶解感、熱中や自発性の放棄などを体験し、(4) やがて元の日常的意識に戻る、以上のような意識状態のことであり、彼はこうした事例を過去十年にわたって数千も集めている。いくつか、例を挙げてみよう。

中学二年の遠足の時である。自由時間に丘の上を走り回っていた。何か看板が立っていたようだったが、あまり気にとめていなかった。遊んでいるうちに、さっきとは少し景色が違ってしまったように思えた。そう思った瞬間に、私の目の前に崖が広がったのだ。私の先にはもう道がなく、スピードを落とさなければと思ったが、このまま崖に落ちてもいいとも思った。そして、崖は私をのみこんだ。その時、私には恐いと言う思いはなく、何故か、当時流行していた歌が心の中で回っていた。岩に顔や手をこすりながら落ちていったが、でもそれが心地良かった。私の体はどンドン落ちていった。心の中の歌の切れ間に崖の上で叫んでいる友達の声が聞こえた。何人も声が聞こえた。それを聴いて私はますます心地よくなっていった。私の体が地面にたたきつけられた時、もっと底まで落ちてしまってもいいと思いながら気が失った。（須原 2000, p15 より事例七）

その頃僕は確かに鉄道マニアだった。それにしても、あの事件は今でも不思議である。それは、母と二人で散歩の途中、母をふり切って子供用の自転車で走っていた時のことであった。

そこは、警報機も遮断機もついていない踏み切りであった。それは緩いカーブが続く途中にあったが、その日は左右確認を怠ってしまった。気がつくと、自分の左手から速度を増しながら接近してくる特急列車が目に入った。「あつ、特急だ」と思った。特に特急が好きだったせいか、「間近で特急が見られる」と思うとうれしくなってしまったのです。不思議と恐いとは思わなかった。列車はヘッドライトをつけて、警笛をならしつつ迫ってくる。僕は「カッコイイ」とさらに思った。

その時、後ろから「危ない！」と叫ぶ母親の声が聞こえてきた。僕は思わずペダルを踏み込んで、踏み切りを渡りきった直後、警笛を響かせ、ディーゼルエンジンのおいを残して、列車は背中をかすめて行った。

その後、母親が顔を赤くし、涙を浮かべながら近寄ってきた。でも、僕は、遠くに離れていく列車のテールランプを眺めながら、もっと間近でしっかり見れなかったことを悔しく思っていた。（同 p16 より事例八）

こうした事例に見られるような体験は、生活上特別な理由もなく何かを認知することをきっかけに起こるとされている。しかし、これは、必ずしも病的

で異常な体験というわけではなく、正常な意識状態の揺らぎの範囲内で起こっていることと考えられている。また、それが破壊衝動のようなものに結びつく必然性はなく、したがって「死への欲望」や「自己破壊衝動」のような心理学的な概念に訴えて理解することは不可能であると須原は指摘する。例えば、以下の事例は、「死への欲望」説が想定しがちな自己への攻撃性の発揮が必然ではないことが示されている。

ある時私は、新しい真っ白なふすまを見ておりました。すると、ぐんぐん吸い込まれそうになって、びっくりして我に返ったことがあります。(同 p38, 事例三十三)

僕は窓の外を眺めるのが好きで、結構やっている。初めは全体を眺めているのだが、ある時、急にある一点に吸い込まれていってしまう。そしてその一点から目が離せなくなってしまうのだ。僕自身、その一点を意識的に見ようとしたわけではなく、気が付いたら、ある一点を見ていたという感じである。その時、ある一点はとてもクリアに見え、その周りはぼかしが入っているようだ。これは別に景色に限らず、教室のどこでも起こり、例えば、斜め前の席に座っている人の指、そして肩にかかる髪などが、僕を吸い込んでいくことがある。…(同 p 39, 事例三十四)

テレビドラマのあるシーンがひどく気に入る、なんとなく気持ちがいいので、何度も巻き戻し、繰り返し見ている。そのシーンは本当にたわいないもので、ただ封筒から手紙を取り出す、というだけのものだった。しかし、私にとってそれは陶酔に近いものだった。(同 p 40, 事例三十七)

このような事例から、何かの認知をきっかけにして特定の誘因反応が生ずることはあっても、それが破壊的、攻撃的な衝動への誘因とは限らないことが分かる。つまり、「死への欲望」などの心理的概念は、こうした事例の本質を必ずしも捉えたものではないのである。

さて、須原が「変性意識」の発露と捉えるこうした体験が、必ずしも病的なものではなく、自己への無意識の攻撃性を必然的な要素としないのであれば、冒頭に挙げた筆者自身の「場所の発見」の体験もまた、そうした「変性意識」の一事例として捉えられようである。例えば、

暴風雨の後、いつも通る橋の下はものすごい濁流でした。追それに見とれてしまって、気が付くと、濁流に吸い込まれそうになり、自分からすうーと入っていきたくなり、びっくりしました。(同 p 24, 事例十五)

田舎へ帰るためフェリーで一泊したとき、寝付かれないので夜中に甲板に出ました。あたりは真っ黒な空と、重いかたまりがゆらゆらしているような黒い海で、ずっと見ていると、体がゆらゆらと揺れてきた、その中に自分が吸い込まれていって溶けてしまいそうな、なんだか自分がその中の一部になって一体化してしまったような気がした。(同 p 39, 事例三十五)

これらの事例は必ずしも地名を伴わないが、体験されている内容そのものは「場所の発見」の一事例とも捉えられそうにもみえる。逆に、冒頭の筆者の体験を、地名を用いずに表現してみよう。

その日、私は朝から仕事だった。駅で電車を降り、地下街のパン屋に立ち寄る。朝の九時半前に焼き上がるベーコンエビがいつもの朝食だった。まだ湯気の上がるベーコンエビを小脇に抱え、階段を上がってスターボックスに駆け込み、オープンテラスに腰を下ろしてコーヒーで一息入れる。風はもう少し涼しくなっていたが、見上げた駅ビルの上空はまだ夏の青だった。その時、背中がざわざわとそよいだ感じがしたかと思うと、次の瞬間、私は地面と空と自分の体が溶けて一つになっていくかのような感覚を覚えた。

このように、地名を用いない形で筆者の「場所の発見」を表現するならば、それは須原の提示する事例によく似た現象について語っているようにもみえる。つまり、筆者にとっての「場所の発見」の体験に伴う誘引反応や独特の体感(周囲との一体感、高揚感、解放感など)は、まさに須原の言う変性意識の事例に通じるものとして理解することが可能なのである。「場所の発見」は、なかんずく筆者にとっては、そうした意識状態が、たまたま地名によって名指されるような対象の認知とそれに対する誘引反応を引き金にして生じたものと考えられることができる。

こう考えると、「場所の発見」の体験とそれに伴う独特の身体的感覚に関して、私個人の体験を超えて一般的に以下のような推測が可能となる。つまり「場所の発見」に伴う独特の身体感覚は、正常な人間の日常生活において、何らかの対象を偶発的に認知することをきっかけに、いつでも生じうるもので

ある、ということである。それは、少なくとも、筆者にとってのみ生じる異常な体験ではない、と考えることが可能となる。

さて、須原はこうした変性意識の体験が日常世界（とそれを支える諸規範のシステムとしての、広義の社会ないし公共圏）を相対化する契機となっていることに注目する。

家の近くの神社に、樹齢何百年の大きな木がある。昔、その木の近くの別の木に登って、木の葉っぱ越しにそのそびえ立つ木を下から眺め上げたとき、なんか体がしびれたような気がして、それ以来変に好きになったのだ。今でもそれを見上げると、気持ち良くなり、疲れがとれるような気がする。それは何かこう、グングンとすごいのである。そして、何か意味があるのだ。しかし、その意味は説明できない。友達に言っても分かってもらえなかった。(同 p 57, 事例四十六)

バスは堀川通りを走っていました。通りの真ん中にイチョウや様々な木が並んでいました。最初はボオーと窓の外を眺めていましたが、木の下の方の根から盛り上がって太くなった部分に目を移してみると、何とも言えない様な、心を洗われたような気分になり、目が離せなくなりました。何故か、その幹の特別太い部分が特別に意味があるように感じたのです。(同 p 58, 事例四十七)

小学三年生の頃、六キロ離れた眼科にバスで通っていました。その日は、バス停につくと、バスが早めに出発した後でした。もちろん、次のバスでは予約の時間に間に合いません。普通なら、あきらめて家に帰るのが自然です。

ところが、その日は病院までマラソンを始めてしまったのです。当時の私は極度の運動嫌いで、六キロのマラソンなどとてもない話だったのです。もちろん、予約には間に合うはずもないのに、どうしてそんなアホなことをしたのか、説明してみます。

まず最初に、バス停で絶望していた私の頭に、「今立っているこの道は病院まで続いている」という考えが浮かびました。これは愚にもつかない当たり前の事実なのですが、何故かその時は、私を魅了し、興奮させました。それは「スゴイ真実」を表す言葉に見えたのです。気が付くと、私は走り出していたのです。

当然、診察は受けられず、帰りはバスで帰りました。しかし、あの時、何か満足感だけはありました。(同 p 70, 事例四十九)

小学生の頃、地図帳を見ていたとき、オセアニアの方

で「トラック諸島」というのを見つけた。なぜ島の名前と車の名前が一緒なんだろうと考えはじめ、そのうち「トラック」という発音が異常に気になりだして、なぜ「トラック」なんだ、なぜ「トラック」なんだ、と横で鳴っていたテレビの音にも気付かずに、おばあちゃんが部屋に入ってきて「もうごはんよ」と言うまで、かなりの時間考えていました。その時、まわりの景色らしきものが、自分のまわりから遠ざかっていく感覚になり、自分が宙に浮いた感じになった。(同 p 49-50, 事例三十九)

ここで報告されている気分においては、「木」や「真理」、「トラック」は日常的な意味からかけ離れた別の意味において認知されている(同 p50)。また、こうした日常性から離れた意味や価値の認識によって、日常的な自己防衛意識や個体保存本能が乗り越えられてしまうこともある。その帰結が、一見「病的な」「自己破壊衝動」であるような体験として報告されていたわけである。

筆者の「場所の発見」の体験に即して言い換えるなら、仕事に向かう途中でいつものように朝食をとるために立ち寄った京都駅は、駅ビルや涼しい風や青い空、スターバックスのコーヒーやベーコンエビの味などの偶発的認知を契機として、「仕事に向かう途中で」立ち寄る「いつもの」京都駅ではなくなってしまう。そこでは、「いつもの」日常的な「京都駅」、言い換えれば、その時に感じた「背中がそよぐような」感覚を決して引き起こさないような「京都駅」の存在は相対化され、京都駅という場所の可能な存在のしかたの一つに後退しているのである。このように、変性意識の事例との類似性を考慮すれば、「場所の発見」は何らかの対象の偶発的認知を契機として日常生活において生じるだけでなく、それ自体がそうした日常生活の一部または全体を相対化してしまう契機ともなっている、ということが推測される。

(2) 語りえなさの問題

しかし、実は、筆者にとってはこれが「場所の発見」の全てというわけではない。なぜなら、「場所の発見」には、須原によっては問題として扱われていない重要な側面がなお残されているからである。冒頭で述べたように、私にとっては、「場所の発見」には独特の「語りえなさ」とある種の固有性が伴っているということが重要な問題であるのだが、須原の

設定する問いの射程内では、この「語りえなさ」の問題が欠落している。これは、変性意識という概念を経由して抽出される日常的な意味から離脱したような「価値」や「意味」を、須原が立論の戦略上、暗黙知の理論などに訴えることで、「理解可能なもの」とみなしていることに由来する。つまり、それらが、「語りえない」ということを問題視する必要がない方向へと、須原の議論は展開していくわけである。たとえば、

ベットの上で本を読んでいて、周囲の空気がプヨプヨしていくように思ったことがある。それはかなりリアルなものだった。(同 p 19, 事例十一)

道を歩いている時、次の角を曲がろうと思ひ、意識だけは角を曲がって歩いているのに、ふと我にかえると、まだ角の手前を歩いていた、ということがある。(同 p 19, 事例十二)

事例十一と十二は、何かの偶発的あるいは積極的な認知をきっかけにしているわけではないという理由で、須原の考察の対象外とされている。しかし私にとっては、須原の考察する事例と同様に、これらの事例も価値を持つ。私の「場所の発見」の報告と、これらの事例は、ある種の「曰く言い難い」体験について語っているという点で共通しているように思われるからである。

変性意識の事例は、須原が自らの関心に沿って蒐集したものとは言え、須原の関心そのものとは独立に存在している現象であるので、私が私の関心に従って考察の題材とすることには問題がない。しかし、そこから須原が展開する議論とそこで提示される諸概念は、私が考察したい問題にとって不向きである可能性が高いことが、いまや明白になった。そこで次に、こうした「語りえなさ」の問題にもう一步踏み込むために、須原の提示した諸事例と類似した現象について、全く別の角度から考えていたと思われる、晩年期のウィトゲンシュタインの哲学的思考をたどることとする。

Ⅲ 場所の発見と存在論的独我論

(1) ウィトゲンシュタインと「語りえぬもの」

ここでは、『哲学探究』第二部におけるウィトゲンシュタインの思索を検討するが、その前に、永井(1995)を参照しつつ、ウィトゲンシュタインの哲学にとつての背景を押さえておきたい³⁾。

ウィトゲンシュタインは独我論について青色本で以下のように語っている。

この独我論を、「私が見るもの(又は、今見るもの)だけが本当に見られるものである」と言って表現できる。そしてまた、「『私』という語で L.W.を意味してはいない。しかし、たまたまこの私が事実として L.W.である場合には、他人がこの『私』を L.W.の意味にとつてくれて結構だ」と言いたい。…注意してほしい。つまり肝心なのは、私の言うことを聞く人がそれを理解できてはならないことなのである(『青色本』 p117) ⁴⁾

これに関して、永井は次のように語っている。

その「私」は、事実としては(他人から見れば) L.ウィトゲンシュタインという一人の人物でしかないだろう。だが、当人の意図としては、L.ウィトゲンシュタインという固有名で指せる特定の人間を指して使われているのではない。それは、…その特定の人間との結びつきに必然性がないような、そういう「私」を意味しているのである。

しかし他方で、その「私」は、特定の人間との結びつきに必然性がない自我のことを、一般的に意味しているのではない。…

…問題は、一般的に想定できるそういう自我たちのうちの一つが、他の自我とはまったく違ったあり方をしたこの私である、という点にあるのだ(永井 1995, p22)。

永井によれば、公刊を意図して書かれたわけではない『青色本』でウィトゲンシュタインが上記のように語ったことは、そのいわば清書である『哲学探究』においては削られている。その理由は、永井によると、「彼の哲学の基本図式は『語りうるもの』と『語りえぬもの』との対比からなるが、独我論をめぐる議論のすべては『語りえぬもの』に属することになるからである」(同, pp.25-6)。ウィトゲンシュタインの「語りえぬもの」は、1.論理の形式や生活の形式など、「世界に関して一般的に関係するという意味で『超越論的』なもの、2.倫理的善悪や宗教的存在など、総じて世界を超えているという意味で『超越的なもの』、この二つに大別できるが、独我論

は後者に関わるとされる。そして、永井のみるところでは、ウィトゲンシュタインは前者に関する見解を前期から中期、後期に至る中で大きく変えていったが、後者に関する直感的な姿勢はほとんど変化させなかった(同、pp.26-28)。

ウィトゲンシュタインの独我論の手触りを表現するために、ここでもまた私自身の体験から出発してみよう。ウィトゲンシュタインの独我論を永井がどう理解したのかを、さらにはウィトゲンシュタインの独我論がどういうものであるのかを私が理解することが出来たのは、私自身がそういった問題を彼らと無関係に考えた経験があったからである。その体験とは、冒頭の「場所の発見」の体験もまたさることながら、何よりも生まれて初めてチョコレートを食べたときに味わった感覚であった。チョコレートの味は、甘い、苦い、酸っぱい、辛いなど、それまで見聞きしたことのある「味を表現する言葉」のどれをどう合成しても言い表すことができないように幼い私には感じられた。それは「あの味」ということでしか、言い表せないような何かだった。そして、その味の表現し難さのあまり、その「どうしても言い表すことができない」「あの味」を感じているのはこの世界で私だけかもしれないということ、そして実際私を感じたその味を他の人も感じているのかどうかということは結局どうしたって分からないのだということに気がついたのである。

だが、このような存在の仕方をしている<私>は、このように語られた途端に、他の人にも理解される「私」、あるいは泉谷洋平という特定の一人物に転じてしまう。そして、そうして理解された瞬間に、「私」は、当初問題にしたかった<私>とは異質なものとなってしまう。あるいは、チョコレートの味に視点において表現し直せば、上記のように語られた途端、チョコレートの「あの味」は、<私>が何とも言えなさを感じたあの味ではなく、「泉谷洋平が体験した誰にとっても不思議で独特な味」か(語られた言葉を聞いた誰かにとって)「自分が食べれば同じように不思議で独特な感じを覚えるであろう味」に転変させられてしまっているのだ。永井は、私と同じように永井自身の<私>の原体験について綴りつつ、以下のような問いを提出している。「では、その私とは誰か?」と。その私とは、永井が語った瞬間に、す

で永井が語ろうとした「私」ではなくなっているのである。

だが、「チョコレート問題」の語りえなさ、ここだけでは終わらない。というのは、<私>の唯一性にせよチョコレートの「あの味」にせよ、それらが語られた瞬間に語られうるものに転じてしまっていると言うとき、そこで「語られているもの」には二重の性格が宿っているからである。一つは、「私」にせよ「チョコレートの味」にせよ、それらが最初から何の問題もなく語られるものであるという理解の仕方において、語られる場合である。この場合、ウィトゲンシュタインが何を語りえないと感じていたのか、私がチョコレートの味をいかに不可思議に感じたのか、永井の言う<私>がいかに孤独で唯一的な存在の仕方をしていったのか、という事柄に対する各人の「哲学的」なこだわりのような物は、他の人には全く理解されることがない。それらは、文字通り「問題なく」理解される。

これに対して、<私>の唯一性やチョコレートの「あの味」が語られうるものに転じる、という場合に、まさに私がウィトゲンシュタインの独我論に対する例示として私自身のチョコレート問題を引き合いに出したように、ある種の「哲学的」な問題を折り込んだ上でそれらが語られ理解されてしまう場合がある。たとえば、ネーゲルが心-身問題の例示として、チョコレートの事例にやはり言及している。

科学者があなたの頭蓋骨の上部を取りのぞいて、あなたがチョコバーを食べている間あなたの脳をのぞきこむとしましょう。そのとき、彼に見えるのはただ灰色をした無数のニューロンのかたまりだけでしょう。内部で何が生じているかを測定するために科学者が道具を使うとすれば、多様な種類の複雑な物理的過程を見つけ出すでしょう。しかし、科学者は果たしてチョコレートの味を見つかるでしょうか。

科学者はあなたの脳の中でチョコレートの味を見つかることができないように思われます。というのは、チョコレートの味がするというあなたの経験は、他の誰にも観察されないような仕方、あなたの心の内部に閉じこめられているからです。(ネーゲル 1993, p41)

この文章を見て、たとえば「泉谷とネーゲルが似たようなことを問題にしている」と理解する人物が存在しうることは十分想像可能であろう。すると、

その時、私のチョコレートの味が語りえないということ、そこに何らかの問題があるということとが同時に理解されていることになる⁹⁾。永井もまた、ウィトゲンシュタインの「私」に対して、同様に接しているように思われる。「その『私』は、事実としては（他人から見れば）L.ウィトゲンシュタインという一人の人物でしかないだろう。だが、本人の意図としては、L.ウィトゲンシュタインという固有名で指せる特定の人間を指して使われているのではない」（永井 1995, p22）と言うとき、永井はすでに、永井自身がまさにそういうあり方をしていることを彼自身の体験において（ウィトゲンシュタインと無関係に）まさに問題として感知しているのであり、そうであるからこそ、ウィトゲンシュタインの「私」をそのように理解することが可能になっている⁷⁾。

以上が、私が見たところの、ウィトゲンシュタインにとっての「語りえないもの」としての独我論、あるいは<私>をめぐる存在論的な問題（永井の言葉を借りれば、独在論）の手触りである。<私>の存在のしかたには、こうしたどうにも語りえない「感じ」がまわりついている。こうした理解を背景に、ウィトゲンシュタインの『哲学探究』の第二部を、以下で検討していきたい。

(2) 意味体験と風景相の変移

言語にとって本質的なのは語の使用とそれにまつわる慣習であり、語の意味は言語活動にとって何ら本質的ではないという考え方が、『数学の基礎』から『探求』の第一部に連なる後期ウィトゲンシュタインの到達点であった。

「意味」という語を利用する多くの場合に—これを利用するすべての場合ではないとしても—一ひとはこの語を次のように説明することができる。すなわち、語の意味とは、言語内におけるその慣用である（『探求』 p43）

ウィトゲンシュタインが『探究』第二部以降の晩年期において考察しているのは、この「多くの場合」の例外と考えられる事例についてである（永井 1995, p183）。ここでは、その「多くの場合」の例外を「意味体験」と「風景相の変移」という二つの事例に基づいて考えてみたい。

たとえば、ある語を特定の意味において使用する

際や、詩や物語に感情を込めて読むときなどに、そこには単なる語の使用以上の何かがあるように感じられる、その「感じ」のことと考えると、理解しやすい。

わたくしが表情豊かな読書をしているときにこの語を発音すると、それは完全にその意味によって充たされている。（『探求』 p 428）

このように、ある語の意味がその発音を充たしているように感じたり、ある語が特定の語感を伴っておりそれが語の使用と不可分であるかのように感じられたりすることがありうる。このような「意味体験」とでも呼ぶべき現象は、確かに、語の使用や慣用の剰余であると考えられるだろう。また、

「わたくしには、<シューベルト>という名がシューベルトの作品やその顔に合っているように思える。」（同 p 430）

『フォートナム』と『メイソン』は相性のいい名前じゃないか、と思う人がいることを、私は想像できる。（『断章』 p 118）

こういった事例も、「語の使用からの剰余」として意味体験の一例と理解できる。

さて、こうした意味体験と同じような位置づけにあるのが、図像が全く異なる風景相（相貌、アスペクト）に見えてしまう際の心的体験である。風景相とは、あるものが「何かとして」見えているときの、「何か」に相当する概念である。

わたくしは一つの顔を熟視し、突然ほかの顔との類似に気づく。わたくしは、その顔が変化しなかったことを見ている。にもかかわらず、それを別様に見ている。この経験をわたくしは「ある風景相^{風景相}の認知」と呼ぶ。（『探求』 p 383）

ある書物、たとえば教科書のいくつかの箇所、次のような図形の載っているのを想像することができよう。



その一部になっているテキストの中では、その都度何

か違ったことが話題になっている。あるときはガラスの立方体、あるときはひっくり返った空箱、あるときはこの形をした針金のわく、あるときは立体角をつくり出している三つの板。テキストはそのつど図形を解釈する。

しかし、われわれはまたこの図形を、あるときはその一つのもの、あるときは別のものとして見ることができる。—それゆえ、われわれはこれを解釈しているのであり、自分たちが解釈するようにこれを見ているのである。(同 p 384)

これらの概念のもとで、先の変性意識の事例を翻訳してみよう。堀川通りの木の根っこに心を洗われたある人は、いつも見ている木の根っこは異なる風景相を認知していることになる。また、トラック諸島の「トラック」が異様な響きを持っているように感じた事例三十九の人物は、地図帳の島に付された地名であるにもかかわらず、それに対し最初に自動車としてのトラックという意味を体験してしまっており、そのことの違和感が報告されているということになる。

さて、後期ウィトゲンシュタインの観点に倣えば、語の意味がある種のルールとして固定されていて、そこから語の使用が導かれるのではなく、語を使用するという実践がまず厳然とした事実として存在し、ルールは事後的に導かれるものである。したがって、意味体験の相違がある語の異なる使用法を規定したり、風景相の変移があるものの異なる見え方を可能にしたりするわけではない。

「シュヴァイツァー氏はシュヴァイツァー〔スイス人〕ではない」と言うとき、わたくしは最初の「シュヴァイツァー」を個有名(ママ)、二番目は種族名と思っている。するとわたくしの精神の中では、最初の「シュヴァイツァー」の場合に二番目の場合とは何か違ったことが起こっていないなくてはならないのか。—最初の「シュヴァイツァー」を種族名、二番目を個有名と思うよう、試みてみよう！—どのようにひとはそれを行うか。わたくしがそうするときには、双方の語のそれぞれに対して、自分の眼前にその正しい意味を持ち出そうと試みながら、緊張のあまり目をしばたたく。—だが、語の通常の慣用に際しても、わたくしは自分の眼前にそれらの意味を持ち出しているのだろうか。

意味をとり替えてこの文章を述べると、わたくしにとっては文章の意義が崩れてしまう。—さて、わたくしにとっては、文章の意義が崩れるが、しかし、わたくしがその報告を行っている他の人にとってはそうではない。

とすると、どのような不都合が生ずるのか。—「でも、その文章をふつうに発する際には、まさしく何か特定の違ったことが起こっているのだ。」—その際起こっているのは、上の<意味を持ち出すこと>ではないのである。(同 p 353)

二つの「シュヴァイツァー」に関して、ウィトゲンシュタインの精神の中に二つの異なる意味体験が生じていなければならないと考えるべき理由はない。なぜなら、そうした差異を上記のように実験的に逆転させたとしても、その発話は逆転させる前と全く同じように他者に通用しうるからである。<意味を持ち出すこと>、つまり内的な意味体験によって、二つの語の使用の差異が成立するわけではないのだ。語の使用において、意味の内的体験は、不可欠な要素にはなりえていないと言える。

同じことは、同一の図像にそれまで見ていたものとは異なる相貌を見いだした瞬間の閃きや驚きといったものについても言える。それらは、たとえそれがその相貌を認識した当の者にとって無視しえないインパクトを持ったとしても、世界内の出来事の記述においては、全く本質的ではない。ウィトゲンシュタインは、有名なアヒルとウサギの反転図形をめぐって、次のように述べている。

うさぎ—あひるの頭がごちゃごちゃした線〔画〕の中に隠れている、と考えよ。すると、あるときには、わたくしはそれをその絵の中に認める、それも端的にうさぎの頭として。その後、あるときには、わたくしは同じ絵を見つめ、同じ線を認めるのだが、しかし、あひるとしてであって、その際、それが二回とも同じ線であったことをまだ知っている必要がない。その後わたくしがいまやその風景相の変移するのを見るとすると、—その際うさぎとあひるの風景相は、それらを別々にごちゃごちゃの線画の中に認めたときとはまったく異なってみられているのだ、とすることができるか。否。(同 p 395)

ここでも、シュヴァイツァーの事例と同様に、うさぎとあひるの風景相が別々に見られていたときと、それらが変移することを見たときとでは、何か違ったことが起こっているとは言えない。

本稿の冒頭で紹介したように、私は確かに、土佐堀通りを縦向きとみなした時に、全く異なった景色を体験した。しかし、いかに私が土佐堀通りの景色を普段とは違ってみていようと、そしてそのことが

私に対していかに驚くべき世界の開闢であろうと、私の報告が表現しているような異なった体験が存在するとは言いきれない。なぜなら、冒頭の報告が理解されたりされなかったりするの、「縦に走る土佐堀通りの感じ」、「横に走る土佐堀通りの感じ」という表現で私が意味しようとしているものそれ自体が理解されるかどうかとは無関係だからである。

ウィトゲンシュタインが、まさに空間認識の風景相について、以下のような事例を提出している。

…わたくしは、知人と一緒にまちの周辺へ散歩に出かける。会話の中で、わたくしがまちは自分たちの右方にあると思ひこんでいることがはっきりする。この仮定については、わたくしには自分にわかるどのような根拠もないのみならず、ある全く単純な思慮が、まちはわれわれの前方左のほうにあることを、わたくしに確信させてくれたのである。いったいわたくしがまちをこの方角に想像しているのはなぜか、という問いに対して、わたくしは最初答えを与えることができない。わたくしには、そう信ずる根拠が何もなかった。だが、たとえ根拠はなくても、わたくしが何らかの心理的な原因を見ているように見える。さらに言えば、ある種の連想と記憶がある。たとえば、われわれはすなわちある運河に沿って歩いて行ったのであるが、わたくしには前に一度、同じような状況の下で、ある運河をたどっていったことがあり、そのときにはまちがわれわれの右方にあったのだ、というように。—わたくしは根拠のない自分の確信の原因を、いわば精神分析ふうに見出そうと努めることができよう。

「しかし、この奇妙な体験はいかなるものか。」—それはもちろん、別のどのようなものよりも奇妙だというわけではない。それは単に、われわれが最も基本的と見なすような諸体験、たとえば感官印象といったもの、とは違った種類のものであるに過ぎない。(同 pp.429-430)

ウィトゲンシュタインはまちが左にあることに気がついた瞬間に、自分がまちは右にあると勘違いしていたことにも気付く。ここでは、風景相の変移が生じている。しかし、風景相が変移する前には「まちが右にある」ことが意識されていたわけでもないし、「運河の右方にまちがある」という風景の印象が内面化されていたわけでもない。そこでは異なった体験が生じているとは言えないのである。とは言え、この手の風景相の変移の体験には、確かに、精神分析ふうなやり方で原因を探ることによっては説明され尽くされない「奇妙」さが残る。しかしながら、

この奇妙さは、公共に理解される種類の誰にとってもそうであるような「奇妙さ」ではなく、ウィトゲンシュタイン（にとつての<私>）にとつてだけ奇妙であるような奇妙さである。他人から見れば、それは少なくとも痛みやかゆみなどの感官印象ではない、という程度の違いしか持たないのである。

だが、そうすると、ウィトゲンシュタインがそこで「何か違ったことが起こった」と言うことは、そもそも全くの誤謬だということになるのだろうか。うさぎ—あひるの反転図形の風景相について、ウィトゲンシュタインは、次のように述べている。

わたくしは二つの画像を見ている。一方ではうさぎ—あひるの頭がうさぎに取り巻かれており、他方ではあひるに取り巻かれているのを。わたくしには同等性が認められない。このことから、わたくしが二つの場合に何か別のものを見ていることが導かれるか。—それはわれわれに、このような表現をここで使うための根拠を与える。

「わたくしはそれを全く違ったしかたで見た。わたくしはそれに一度も気がつかなかった！」さて、これは感嘆である。そして、これにもまた言い分がある。(同 p 388)

ここで、ウィトゲンシュタインは、「何か違ったことが起こった」と言うことに、言い分を認めている。また、先の引用部分において「その後わたくしがいまやその風景相の変移するのを見るとすると、—その際うさぎとあひるの風景相は、それらを別々にごちゃごちゃの線画の中に認めたときとはまったく異なってみられているのだ、と言うことができるか。否。」と述べた直後に、以下のようにも述べている。

しかし、その変移は、[各相の] 認知が呼び起こさなかった驚きを呼び起こす (同 p 395)。

さらに、先ほどのシュヴァイツァーに関する引用箇所も、もう一度注意して読む必要がある。「でも、その文章をふつうに発する際には、まさしく何か特定の違ったことが起こっているのだ」という主張に対し、ウィトゲンシュタインは、「何か特定の違ったことなど何も起こっていない」とは反論していない。ウィトゲンシュタインは、「特定の違ったこととは、意味体験の違いである」という考え方を否定しているのであって、風景相の変移に伴う驚きや閃きなど

が存在しないと主張しているわけではない。彼は、確かに、それらが通常の実践（語の使用）においては外的な要因であり、事態の本質に関わっていないと考えていた。語を使用してコミュニケーションを図るために意味体験を持つ必要はないし、何かをある風景相の下で把握するためにその何かを自ら発見して驚かなければならないというわけでもない。しかし、そのことによって、意味体験や風景相の閃きといった形で報告されたある種の体験あるいはその驚きがそこで生じたということ、それ自体の事実性が無くなってしまいうけでは決してない。

このような、あらかじめある仕方では把握されながら語り尽くすことのできないような事柄に関して、それらの発見の際に発せられる言葉を、ウィトゲンシュタインは「認知の叫び」と呼んでいる。

わたくしはある動物を注視している。ひとはわたくしに「何を見ているのか」とたずねる。わたくしは「うさぎ」と答える。一わたくしはある風景を見ている。突然一羽のうさぎが走りすぎる。わたくしは「うさぎ!」と叫ぶ。

この報告および叫びの双方は、知覚ないし視覚体験の表現である。しかし、この叫びがそうであるのは、報告とは違った意味でなのだ。それはわれわれから漏れ出てくるのである。その体験に対する関係は、悲鳴の苦痛に対する関係に似ている。(同 p 391)

わたくしがいま、おそらくはすでに長い間そのひとのいる方角を眺めたあとで群衆の中に自分の知人を認めるとすると、一これは一つの特異な見かたなのか。見、かつ考えることなのか。それとも双方の融合したものなのか。一わたくしが危うくそう言いたくなくなってしまうように。

問題は、なぜひとはそう言いたいのか、ということ。

見られているものの報告でもある当の表現は、ここでは認知の叫びになる。(同 p 393)

言うまでもなく、風景相の変移の際に発せられた「わたくしはそれを全く違ったしかたで見た。わたくしはそれに一度も気がつかなかった!」という感嘆も、この「認知の叫び」と考えられる。そして、それは、語られるようなものではないとは言え、ウィトゲンシュタインにとっては少なくとも叫びの主が何かを掴んだことでの表現になっているのであり、それゆえに「言い分がある」のだ。逆に、ウィトゲ

ンシュタインがこうした叫びに言い分を与えうるのは、彼自身がそれと似たような体験を経験しているからだ、とも言える。

実際に、逆説的にもウィトゲンシュタイン自身がこうした閃きや驚きの体験を動機として哲学的な仕事をしていたと考えざるをえない側面が、ウィトゲンシュタインの著作の端々に見受けられる。ウィトゲンシュタイン自身の哲学の背後には、常に発見や閃きの体験が持つ独特の独我論的感覚があるように思える。たとえば、晩年に教授を辞めて癌を宣告された後、ウィトゲンシュタインはノーマン・マルカムに宛てた手紙に、以下のように書いている。

大変なことが起こった。一ヶ月ほど前、突然、哲学がやれるような精神状態になったのだ。再び哲学がやれるなんて、夢にも思っていなかったのに。頭の中に垂れていた幕が上がった感じだ。二年以上もなかったことだ。とは言っても、まだほんの五週間ばかりやっただけだし、明日はもう駄目になってしまうかもしれない。だからこそ、ますますやる気が出て来る(永井 1995, p195 より)

「哲学がやれるような精神状態」、哲学を「やる気」などといった概念は、「閃き」や「意味体験」などと同様に、ウィトゲンシュタインの哲学においては、言語の使用にとっては本質的でない要素のはずである。にもかかわらず、彼はそれが何であるのかをつかんでいたし、それについて雄弁に語ってもいた。さらには、この手紙の筆致から伝わってくるように、ウィトゲンシュタインにとっては、おそらくそういったものが哲学をする動機づけとして不可欠でさえあったのである。

まさしく、永井が言うように、

…「語りえぬもの」とは何か?それを理解するためには、彼がほんとうに語りえなかったものが、語りえなかったにもかかわらず、いや語りえなかったからこそ、ある仕方では、あらかじめつかまれているなければならないのである。(同 p26)

私としては、(1)で提示したウィトゲンシュタインの「私」や永井の<私>もまた、こうした文脈において理解しておきたい。

しかし、ここでもまた、それに対して思わず「認知の叫び」を上げることができるような「語りえぬ

もの」がそこに存在するのだ、と言い切ることはできない。

しかし、あなたの念頭に浮かぶ語は、何か特別なしかたで<現れて>こないか。とにかく注意してみよ！—綿密な注意などわたくしには何の役にも立たない。どっちみち、それは、いまわたくしの中で何が起こっているかを発見させてくれるだけであろう。

そして、どのようにしてわたくしは、いままさに、ともかくそれに耳をすましていることができるのか。ともかく、わたくしは、ある語が再びわたくしの念頭に浮かぶまで待っていなくてはならないであろう。しかし、奇妙なのはまさしく、わたくしにはその機会を待つ必要がなく、もしそれが実際に出てこないのなら、それを自分の前に引き出してくることができるように思われることである。だが、どのようにして？—わたくしがそれを演ずるのである。—しかし、わたくしはこのようなしかたで何を体験することができるのか。いったい何を模倣するのか。—特徴的な随伴現象を、である。主として、身ぶり、顔つき、抑揚。（『探求』p 437）

われわれは、認知の叫びを身振り手振りや声の抑揚、表情などといった身体的な振る舞いにおいて、通常の視覚体験の報告とは区別しうるかも知れない。しかし、そうした身振り手振りや声の抑揚、表情などもまた、模倣反復が可能であり、それゆえに偽装さえ可能なのである。冒頭の私自身の報告も、須原の変性意識の事例も、それらが全くのフィクションであったということは、いくらでも可能である。チョコレートの味に不思議な感覚を覚えたかのように振る舞うことも、谷町筋や京都駅にあたかも違った風景相を見たかのように偽装することも可能であるし、ウィトゲンシュタインが「まちが右にある」と勘違いしていた振りをすることもありえた話である⁸⁾。

こうして、ウィトゲンシュタインは、語りえぬものに対する結論を留保し続け、問いを発し続ける。「答えなど無いということを知ることが重要なのだ」という悟りさえも、最後の答えではない（なぜなら、その後も彼はなお問い続けているのだから）。永井は、そうしたプロセスの中においてのみ辛うじてかいま見られるものこそが「他者問題」において真に問題となるべき「他者」であると考えている。しかし、これもまた、ウィトゲンシュタインの「精神」

（というまさに「語りえないもの」）に照らせば、永井の論考を一旦区切るための便宜的な結論に過ぎないとみるべきだろう。

さて、以上の議論から、「場所の発見」に関して、次のような問いを立てられる可能性が見えてくる。

「場所の発見」の際にある場所が独特の「語りえない」様相を帯びて立ち現れることと、そうした「場所の発見」がある種の固有性をもって体験されていることには、独我論の語りえなさや独我論的な「私」の唯一性とが関係しているのではないだろうか。少なくとも、変性意識の事例と同様に、何かを偶然的に認知することをきっかけとして、日常見えていたものとは異なる風景相において対象を発見し、思わず「認知の叫び」が漏れ出るような瞬間においては、日常的な自我意識は薄らいでいる。したがって、「認知の叫び」やその事後的な想起において、それらが自我の唯一性として表象されるのか、出来事の固有性として表象されるのか、あるいは場所の特異性として表象されるのかといった違いには、大きな意味はない。そこでは自我とか出来事とかといった言葉の日常的な意味は薄らいでおり、そのことが、世界に一体化していくような感覚や吸い込まれていくような感覚、ある種の解放感などとして経験され記述されているからである。したがって、場所の固有性が独我論的な<私>の固有性に還元されるとは言えないまでも、ある場所の独特な風景相を驚きとともに発見するとき、その驚きの中には<私>の比類なさを感知したというサインが含まれているのではないかと考えることはできそうである。

IV むすび

本稿は、あくまで覚え書きであり、筆者が直感的に重要性を感じた問題に対する触感を保持するために書かれている。実際にそうした問題そのものを検討していく試みは、別の機会に譲られることになる。本稿が変性意識や意味体験、風景相の変移などの事例を数々紹介したのは、こうした問いが有意義に立てられるとともに、その問いを実感するための素材も十分に存在するのだということを明らかにするためである。本稿で紹介した事例や紹介の仕方は、ど

ちらかといえば、「独我論的な<私>の固有性を源泉として、場所が、そしてそれゆえに地名が独特の固有性を帯びることはありうる」という立場を補強するものに偏っていた。今後の作業では、その反証例も検討していく必要もあるだろう。

本稿を閉じるにあたって、ここまでほとんど論じてこなかった問題について、筆者の考えを述べておきたい。それは、他者の問題と学問の社会性に関する問題である。

ウィトゲンシュタイン的独我論を基底とした世界観には、<私>ではないもの、つまり他人や他者と呼ばれるような存在者が登場しないように見える。しかし、これは必ずしも他者の不在を意味していない。というのは、<私>が世界を開く唯一の原点でありながら、その原点がたまたまこの私であることに何の必然性もないということのうちに、他者の存在が仄めかされているからである。「場所の発見」の例に照らせば、私は京都駅の空に確かに何とも言えない独特の空気を感じて、「京都駅」という語にその意味体験を込めたのだった。しかし、京都駅の雰囲気の本質が、私とその語に込めた「そういったもの」である必然性は全くない（これは、私にとってチョコレートの味が「ああいったもの」である必然性が全くないと感じられたことに対応する）。そして、その必然性のなさという点に、別の「そういったもの」や「ああいったもの」が存在する可能性が忍び込む。

永井(1991)はこのように決して<私>からは到達されえないにもかかわらず、<私>を語った瞬間に忍び込まざるをえないような<私ではないもの>の内に、他者という存在者の本質を見だし、そうした他者に向う態度を「<魂>に対する態度」と呼んでいる⁹⁾。「<魂>に対する態度」の手触りを永井の論考に沿って精緻に描き出すには、残念ながら紙幅のゆとりがない。代わりに、私なりの言葉で到達可能なレベルの読者に向かって呼びかけることにしたい。

「場所の発見」という私の体験には、曰く言い難い独特の驚きがまとわりついていて、それは何を聞いてもまずは<私>にとって曰く言い難いもので、最初から誰にとっても曰く言い難いものであったのでは決してない。「場所の発見」とは、私にとって、そういった意味での強烈な固有性を帯びた、しかし全くありふれた陳腐な出来事でもあった。そして、そ

れがどういった感じなのか、その感じがいかに曰く言い難いか、にもかかわらずいかに陳腐でありふれているのか、こういったことを、どこまで行っても払拭できない「伝わらなさ」とともに伝えることが出来るのは、なぜかたまたま他の人ではないこの私だけなのである。ところで、この私ではない他の人にも、そういった固有の「語りえなさ」があるのだろうか。あるとすれば、それはどのように表出されるのだろうか。そして、それが私の理解を全く超えるものであったとき、反感、拒絶、排除に傾くことなくそれらと「共在」という選択は、いかにして可能になるだろうか。

私が語りうる他者は、所詮他者そのものではない。私は私の世界の外側を決して語ることはできない。しかし、私が徹底的に私について語り続けようとする営みにおいて、私の世界の外側は予兆として示される。他者とは、私に語られるべきものではない。私に対して語りかけるものこそが、他者なのである。そうした意味で、他者というものは本稿の中において存在を与えられるべきものであるはずがなく、むしろ本稿の外側にいて本稿に対して何事かを語りかける（あるいは無視する）ものこそが他者と呼ばれるべきである。そして、社会性の次元というのもそうした不透明な他者との不透明な関係そのものに他ならないのであって、それ以外に本稿が言及すべき重要な社会性の次元など存在しないと筆者は考えている。社会性や他者について饒舌に語る時、私たちはそれらを外部的視点から観察し記述し分析できる透明な対象として扱いがちになってしまう。その結果として、現に今ここで生きている個人を取り囲むものとしての社会性の次元が不透明なものであり、時に理不尽なものでもあるというごく当たり前の事実が忘れられがちになっていないだろうか。

およそ曰く言い難い謎や問題をめぐっての、歯ざしりしたくなるようなしどろもどろのコミュニケーションによってしか、人間に関する学問的な知が学ばれることはないように思われる（社会に関する学問的な知はそうとも限らないだろうが）。そして、各人の立場なりに、各人にしか問題にしないような「語りえなさ」を問題として表出し続けていくことでしか、学問の自由と学問的営為を通じた表現の自由は実現しないのに違いない。

社会がより良いものになっていくプロセスにおいて、新しい段階の社会で善とされていることがら、古い段階では決して抵抗なく受容されるような善ではない。おそらく学問的な表現の自由とは、ある時点において未だ善として認められていない価値を主張しうるために最低限必要な条件の一つであると思われる。私たちそれぞれが、それぞれにしか問題に出来ないことを言葉にし、時には相互に相反するそれらの言葉を共在させるような場を実現していくことで、実践的に学問的な表現の自由を体現していくのであれば、たとえ私たちが生きている同時代に評価されることはなくても、それもまた一つの社会的貢献であるとは言えないだろうか。そして、それは地理学者にも地理学者固有のやり方で可能な貢献のあり方であると思われる。

付記

本稿は、第 87 回地理思想部会（2006 年 11 月、於近畿大学）での発表「地理学の開闢、あるいは語りえぬものの地理学」の際に、発表予稿として公開した文章に加筆修正を施したものである。発表の際に中島弘二氏（金沢大学）、立岡裕士氏（鳴門教育大）、松本博之先生（奈良女子大学）から、貴重なコメントをいただいたが、それらは本稿のまとめ直しの作業にも部分的に反映されている（とりわけ第 I 章と第 IV 章）。また、本稿の内容には直接反映されていないものの、大城直樹氏（神戸大学）、大西宏治氏（富山大学）、島津俊之氏（和歌山大学）、若松司氏（大阪市立大院）、故玉懸慎太郎氏（法政大学院、当時）からも、後の研究にとって刺激となる興味深いコメントをいただいた。以上の皆様に記して感謝いたします。

注

- 1) ウィトゲンシュタインはアスペルガー症候群であった可能性が高いことが指摘されている（たとえばギルバート 2003）。福本は、ウィトゲンシュタインの哲学的な論考が、同時にアスペルガー型自閉症者の経験構造の理論的表現になっていることを指摘する（福本 1996）。

アスペルガー症候群においては、触覚や知覚、身体的位置感覚などを司る脳の機能において、過敏であったり鈍麻であったりと、さまざまな顕著な特徴があることが知られている（マイルズ他 2000）。空間や場所

に対する感覚は、さまざまな感覚（位置感覚、視覚、音、匂い、温度…）を総合したものであると考えられるので、私的感覚のレベルでアスペルガー者とそうでない者との場所感覚に大きなずれがありうることは、十分に想像可能である。

さらに、福本（2004）は、ウィトゲンシュタインが類希なる才能によって、アスペルガー者の世界観を越えてあらゆる人間の心の働きに通底する基本構造に到達し得ていることを指摘している。また、後に紹介する須原（2000）の事例に鑑みれば、そうした共約不可能なほど特異であるかに見える場所感覚は、アスペルガー症候群という特殊な事例とは無関係に誰にでも生じるものであるかも知れない。

従来地域や場所の固有性が語られる際、それは誰にとっても同一の固有性として理解されることが多かったように思われるが、上述の事情を考慮すれば、「他者に共有されないような私的場所感覚」という問題についてもっと考えてみてもよいように思われる。そうであれば、筆者が何を問題にしているのかさっぱり理解できない人が存在するというのは、議論の破綻ではなく、むしろ議論の出発点としてみなされるべきであろう。

- 2) さしあたって、こうした私の体験を「場所の発見」と命名する際に、「場所」や「発見」という言葉に深い意味が込められているわけではない、ということをおそらく断っておきたい。「場所の発見」は、単なるラベルにすぎない。
- 3) これ以降、本稿のウィトゲンシュタイン読解は、明に暗に永井（1995）を基礎としていることを、あらかじめ断っておきたい。
- 4) 以降、ウィトゲンシュタインの『草稿 1914-1916』、『青色本』、『哲学探究』、『反哲学的断章』それぞれからの引用の際は、『草稿』、『青色本』、『探求』、『断章』と略称することにする。また表記されているページ番号は、『断章』を除いて、ウィトゲンシュタイン全集においてそれぞれの著作が所収されている巻のページ番号である。
- 5) 以降、特に永井やウィトゲンシュタインが理解したような、存在論的に見て独我論的にしかありえないようなレベルの私を<私>と表記する（永井の表記法を参考にしているが、必ずしも永井の<私>の用法とは一致しない）。これに対して、「私」と表記する際は、そうした<私>が言語化されて誰にでも理解可能な一人称になってしまったものを指し示すこととする。
- 6) 西も他者の問題を例示する際にチョコレート味の引き合いに出している（西 2002）。私が個人的にチョコレートの味に対して独我論的な世界の手触りを得たのは偶然によるが、どういふわけかそうしたチョコレートをめぐる偶然は私に限ったことではないようである。独我論の世界観をめぐる問題の興味深さとともに、

哲学においてチョコレートという記号を持つ偶然以上の象徴的文化的な意味合いについても、考えさせられる。筆者の体験も、場合によっては、筆者の自覚しないところで、そうした社会的な次元において初めて成立しているものなのかもしれない。

- 7) 私自身に関しても、永井の著作を読んだことがチョコレート問題を思い出すきっかけになったとはいえ、永井やウィトゲンシュタインを知るはるか以前にチョコレートの味を「あのように」体験すること（あるいはそれと類比的体験）がなかったら、彼らの文章をこのような形で理解することは不可能だったかもしれない。
- さらに、まだ問題はそこで終わるわけではない。たとえ哲学的な問題を折り込んだ上でそれらの「語られたもの」を理解したとしても、なおそれは「語られたもの」とは異質だと断言できるからだ。その意味では、この期に及んでもなお、「語りえない」問題は残り続ける。あるいは、どの期に及んでも必ず語りえなさが残る、という構造を持った問題や、物事の根本的にそうしたあり方を、なぜか私は直感的に把握してしまった（そして私以外の人にもどうやらそれが可能らしい）、というところに問題の核心がある、とも言える。
- 8) なによりも、私自身が、私自身の「反復不可能と思えた不思議な体験」を想起し報告できると言うことこそが、この偽装可能性がどうしようもなく存在することの現れである。これは、本稿で、私が記憶や身体に基づく「私の同一性」を与件として論を進めていることの問題とも関わっているが、紙幅の都合と問題を複雑にしないための配慮から、この点に関しては括弧に入れたまま論を進めることにしている。
- 9) ウィトゲンシュタインも、ある人に対して「彼が自動機械ではない」と信じる時、その人に対する態度のことを「魂に対する態度」と呼んでいる（『探求』pp355-356）。自動機械が自動機械である限り、それは単に語りうるものだけを語り、そして語りえないものは端的に語らない。ある対象をそういった自動機械ではないものとして認識するということは、対象が語りえないものに対して何かそれ以上の振る舞いをしていることを認めることに他ならない（その何かが原理的にはこの<私>が知りうる世界には属さないとしても）。「顔はからだの魂である」（『断章』p74）、「人間の身体は、人間の魂の最良の映像である」（『探求』p356）などとウィトゲンシュタインが表現したことは、身体の微妙な陰影や表情が言語の使用において重要な要素であるという平板な主張をはるかに凌駕する重大な意味を持っている。魂の鏡像としての顔と体こそは、「言語と戦争中」（『断章』p46）だったウィトゲンシュタインにとってのまさに主戦場だったのである。私は、おそらくはぎりぎりの判断によって書かれたこれらの文に、「悟り」という形で実現された、言語との戦争に

おけるウィトゲンシュタインの完全な勝利（とウィトゲンシュタイン哲学の決定的な敗北）を見出さずにいられない。

文献

- 福本修 1996. 「心の理論」仮説と『哲学探究』—アスペルガー症候群[から／を]見たウィトゲンシュタイン. *image7-11*: 144-163. ([http:// home. u02. itscom. net/ fukumoto/ hp/ shyohyo/ archives/ asperger. html](http://home.u02.itscom.net/fukumoto/hp/shyohyo/archives/asperger.html) 2009年1月21日検索).
- 福本修 2004. アスペルガー症候群と Wittgenstein. *精神科治療学* 19-10 ([http:// home. u02. itscom. net/ fukumoto/ hp/ shyohyo/ archives/ asperger_and_wit. html](http://home.u02.itscom.net/fukumoto/hp/shyohyo/archives/asperger_and_wit.html) 2009年1月21日検索).
- ギルバーク,C 著, 田中康雄監修, 森田由美訳, 2003. 『アスペルガー症候群がわかる本—理解と対応のためのガイドブック』明石書店.
- マイルズ,B, クック,K, ミラー,N, リナー,L, ロビンズ,L 著, 萩原拓訳 2000. 『アスペルガー症候群と感覚感性への対処法』東京書籍.
- 永井均 1991 『<魂>に対する態度』勁草書房.
- 永井均 1995. 『ウィトゲンシュタイン入門』ちくま書房.
- ネーゲル, T.著, 岡本裕一朗・若松良樹訳 1993. 『哲学ってどんなこと?—とつても短い哲学入門』昭和堂.
- 中島弘二 2003. 記号の限界. *地理学評論* 76: 176-179.
- 成瀬厚 2003. 場所名と記号体系—大平論文に対するコメント. *地理学評論* 76: 172-175.
- 西研 2002. ぼくの世界, きみの世界. 木下順二・今西祐行他著『ひろがる言葉 小学国語6上』(平成17年版), 46-53.
- 大平晃久 2002. カテゴリー化の能力と地名. *地理学評論* 75: 121-138.
- 大平晃久 2003. 信念・知識体系の一環としての地名—中島氏と成瀬氏の批判に答えて. *地理学評論* 76: 180-183.
- 須原一秀 2000. 『高学歴男性におくる弱腰矯正読本—男の解法と変性意識』新評論.
- ウィトゲンシュタイン,L.著, 奥雅博訳 1975. 草稿 1914-1916. 『ウィトゲンシュタイン全集 1』大修館書店
- ウィトゲンシュタイン,L.著, 大森莊蔵訳 1975. 青色本. 『ウィトゲンシュタイン全集 6』大修館書店
- ウィトゲンシュタイン,L.著, 藤本隆志訳 1976. 哲学探究. 『ウィトゲンシュタイン全集 8』, 大修館書店
- ウィトゲンシュタイン,L.著, 丘沢静也訳 1999. 『反哲学的断章—文化と価値』青土社.

